

い。
「在所の東にあるのに、西川とはなんじゃ」とは、古来からのクイズである。

古代編

(括弧内は史料を表す)

福島 of 立地条件や、周辺の河川・白山の成り立ちまで調べなければ、片手落ちの免れない論文になることを恐れて、この論文を記したことを了解されたい。

明治七年の事である。

白山の麓の深瀬の通称「うまのまき」という所で発見した化石をドイツ人のラインという学者が自国に持ち帰り、調べたところ、なんと一億数千年前の上部ジュラ紀のものであることが判明し、明治十年に学会に発表したことから、大きな話題となり、更に調べたところこの辺一帯の化石は羊歯・ソテツ・松等の植物性のもの他、淡水の貝のみで海水棲動物が全然見当たらないことから、この化石が海と絶縁した湖底で土砂類と共に堆積したものである、と推定され、この化石の産出する尾添川左岸から牛首川を含む、白山西北麓一帯を『手取統』と呼ぶよう

になった。

この名称は、明治二十七年(一八九四年)、横山又次郎博士が命名したものである。

この大きな湖も土砂の堆積や湖底の隆起によって次第に浅くなり、手取湖の出現から消滅まで五千万年という、気の遠くなる長い年月が経過したと学者は語っている。

その後二千万年昔と言われる頃、また地球の地殻変動の時期、すなわち活発な火山活動の時期を迎え、その溶岩が固まった数万年後に「流紋岩」を噴出する火山活動の時期があり、この活動が休止する頃、この溶岩が侵食され、風化され礫岩や砂岩としての累積してゆく時代があった、と言われる。

鶴来町の東方から河内村にかけての一大亀裂が生じ東の方が高く、西の方が低く、その境が裂け目になった断層が手取川を形成する事になったし、新しい火山活動が始まり白山が出現するのが、この時代で百万年前であるという。

昭和四十四年(一九六六年)、金沢大学理学部地質学教室から出た「手取統」という論文の『上部ジュラ紀手取統』という論文に